

若手大工育成プロジェクト 第一回大文賞贈呈式

平成 25 年 10 月 12 日(土)
職藝学院 名匠情報センター大研修室

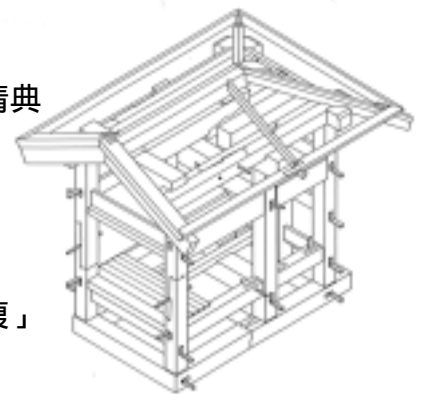
主 催
学校法人富山国際職藝学園

協力 工学院大学

後 援

富山県、富山市、高岡市、富山大学芸術文化学部、富山国際大学
一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築士会連合会
全国建設労働組合総連合(全建総連)、一般社団法人全国中小建築工事業団体連合会(全建連)
一般社団法人JBN、株式会社北日本新聞社、北日本放送株式会社、富山テレビ放送株式会社

- 挨拶 …………… 13:30 ~ 13:40
学校法人富山国際職藝学園理事長 稲葉 實
- 選考経過 …………… 13:40 ~ 13:50
選考委員長・日本建築士会連合会会長 三井所清典
- 贈呈式 …………… 13:50 ~ 14:10
団体部門 個人部門 特別賞
- 記念講演 …………… 14:10 ~ 15:10
ブータン王国 キンレイ・ウォンチュック氏
「ブータンの伝統建築・大工技術と文化財の修復」
- 受賞者との交流 …………… 15:10 ~ 16:00



だいふみ

大文賞について

わが国固有の木造建築の伝統技術・技能を後世に引き継ぎ、木造建築づくりを支え、未来へつなぐ若い担い手を育成する重要性が叫ばれて久しいにもかかわらず、それを実質的に支援する活動は稀有でありました。

2011年3月11日の東日本大震災を境に、全世界から日本の伝統的“結い”の国民性が見直され評価されました。時あたかも、西の西岡常一、東の田中文男と言われた田中文男棟梁こと“大文さん”が亡くなり、有志による“偲ぶ会”には数百人の方々が日本列島津々浦々から東京に参集され、田中棟梁の足跡の偉大さを偲び合いました。生前、棟梁の警咳に触れ、元気をもらった方々の共感の場となっていました。このエネルギーをぜひ次世代につなげないか！ということから「若手大工育成プロジェクト」がスタートしました。

職藝学院初代オーバーマイスター田中文男棟梁は、生前様々な機会を捉えて若手建築技術者・技能者の育成に大いなる熱意で取り組み貢献されてきました。当学校法人はその姿勢と意思を継承し、偲ぶ会有志のご指導とご協力を得て、大工育成に真摯に取り組んでいる機関や将来性のある若手大工を顕彰する「若手大工育成プロジェクト『大文賞』」事業を行うこととし、第一回の募集を昨年来より行い今日ここに各賞の贈呈式を行います。

第一回大文賞受賞者

団体部門

『大文賞』奨励団体 三重県立四日市工業高等学校 建築科



- ・大正 11 年(1922)創立、校訓に「技術と精神」を掲げ、昭和 25 年工業科と普通科を持つ現在の校名となる。
- ・「建築科」は定員 40 名、約 2 割が建設関連へ就職し、科の目標は“ 建築に関する基礎知識と技術を習得し、建築技術の進展に伴う新分野への適応力を身につけ、何れの関連職域にも進めること ” としている。
- ・専門科目は全体の約 45% の 37～41 単位で、実習は現役大工の指導で週 2 回計 6 時間行われ、「ものづくり三重県大会」出場特訓も行っている。
- ・「継手・仕口」の活用については、選考委員会から、担当教員が自ら使い方を熟知し木造建築教育に生かしてほしいという要望が出されている。

個人部門

『大文賞』大工 佐々岡由訓 ささおか よしのり



- ・1981 年広島県生まれ、広島県広島市在住。(有)佐々岡建設(広島市)勤務、大工職歴 9 年。広島大学工学部第四類卒業、1 級建築大工技能士・一級建築士。
- ・[講評]道具の扱いでの評価は低かったが自分の考え方や方向性がしっかりしている。実技では初めて見る継手や仕口に戸惑いを見せながらも何とか形になっていた。向上心もあり建築知識もそれなりに豊富で、経験の少なさは今後の努力や更なる向上心で補っていけるだろう。新しく伝統構法にも挑戦してほしい。

『大文賞』奨励大工 池田 祐亮 いけだ ゆうすけ



- ・1983 年富山県生まれ、富山県南砺市在住。盛田工務店(富山県南砺市)勤務、大工職歴 12 年。砺波建築高等職業訓練校卒業、1 級建築大工技能士・二級建築士など。
- ・[講評]大工としての経験は最も豊富で、全く違った分野からこの道に入って努力を積み重ねてきたことがうかがえる。率直な人柄で、各種資格を取得するなど向上心も高い。実技の仕口継手では試行錯誤しながらもコツコツと取り組んでいた。

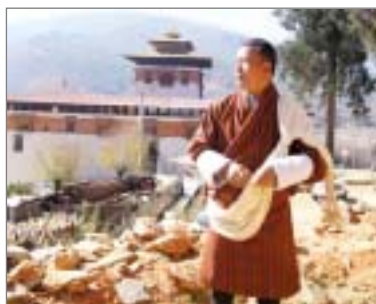
『大文賞』奨励大工 高山 智久 たかやま ともひさ



- ・1980 年三重県生まれ、石川県金沢市在住。(株)沢野建設工房(石川県かほく市)勤務、大工職歴 13 年。職藝学院卒業、二級建築士。
- ・[講評]質疑応答にははきはきと答え、トラブル対応への評価は高かったが、木材に対する関心など更なる向上心が求められる。実技では最初に部材を分類するなど段取りを考えていたことや道具の扱いなどは評価が高かった。

特別賞

『大文賞』特別賞 ブータン王国内務省主任技師 キンレイ・ウォンチュック 氏



- 1962 年 ブータン王国のパロで生まれる
- 1980 年 プナカで学校卒業後ブータン王国内務省に技官として就職
- 1992 年 国際交流基金招聘プログラム(受入機関：文化財建造物保存技術協会)で来日、歴史的建造物の修復・保存技術を研修
- 2013 年 現在、東ブータンのペマガツェルでゾンを再建中
キンレイ氏はこの間トンサ・ゾンの修復監督や西ブータンのチュカでゾンの再建などに取り組む
尚、ゾンとはブータンにおける行政庁・城塞・僧院を兼ねる中心的建物のこと

1992 年、歴史的建造物の修復と保存の専門技術者として日本へ招聘されたキンレイ氏は、各地の修復現場で数多くの日本人技術者と交流しながら修復と保存の技術を学んだ。とりわけ国際的な視野を持った田中文男棟梁から学んだ知識と思想が、ブータンへ帰国してからのキンレイ氏を支え、国際協力の見事な証として開花している。

ここに泉下の田中文男棟梁に恥じることのない人物として「大文賞」特別賞を贈呈する。

選考経過と講評

選考委員会	委員長	三井所清典	日本建築士会連合会会長、芝浦工業大学名誉教授
	委員	山岡 義典	市民社会創造ファンド運営委員長、日本 NPO センター顧問
		山本 博一	東京大学大学院教授
	後藤 治	工学院大学教授	
	岩瀬 繁	岩瀬建築有限会社代表取締役社長	
	島崎 英雄	大工棟梁、職藝学院オーバーマイスター	
	稲葉 實	学校法人富山国際職藝学園理事長	

総評

第一回「大文賞」への応募数は、団体部門で2点、個人部門で6点であった。初めての試みであり、応募が少なかったが、次回は応募が増えることを期待したい。「大文賞」は田中文男棟梁の遺志を受け、若手大工を育成する目的で創設されたものであるが、その主旨にかなった結果になったと考えている。

選考は7月13日に行われた。団体部門は提出された調書をもとに選考委員の話合いによって決定した。個人部門は事前に書類選考を行い、最終選考の面接出席者を3名に絞り込んだ。書類選考に当り、募集要項に示された要件を満足しているかどうか、大工職能に対する考え方がしっかりしているかどうか、を基準とした。提出される資料は少なかったが、選考委員会で議論を重ねるには十分であった。団体部門では、学校での木造建築教育と企業における大工育成の実績をどのように評価するか、個人部門では、大工には棟梁と職人と経営者タイプがあり、「大文賞」としてふさわしいのはいずれなのか、応募書類からうかがわれる実績や簡易な実技考査についてどのように評価するかなど、選考委員会で熱心な議論が交わされた。面接は共通の質問と簡易な実技考査の2本立てで行った。実技考査によって、継手・仕口についての知識や段取り能力などが判断できると考えた。

団体部門

団体部門への応募は、1点は四日市工業高校からのもので、日頃から、実習授業で本職の大工を招いての教育を行っているが、木造建築教育のさらなる充実を目的に継手仕口模型を活用するというものであった。もう1点は重川材木店建築部で、企業内での職人養成や社員訓練に模型の活用をするというものであった。重川材木店は、かねてより匠塾という認定職業訓練校を運営していて、大工職人の育成には、高い実績がある。現在は、大工だけでなく、左官の養成も行っている。模型は、若者の育成だけでなく、一人前の職人のレベルアップにも十分に活用できるとのことであった。社内でレベルの高い大工技術の養成を実践し、すでに「模型」を活用していることは先駆的活動として高く評価できる。

選考は提出された調書をもとに、選考委員の話合いによって決定した。実績、取組み、副賞となる継手仕口模型の活用についても考慮した。選考に当り、「大文賞」の主旨やねらいは何かということ再度、選考委員会で議論がなされた。田中棟梁が生前、木造建築にかかわる初心者の人々にとって、継手・仕口を勉強し、正確に認識することが必要欠くべからざることと言われていたことから、企業内の訓練も価値あることであるが、今回は学校教育の一環として、大工育成に積極的に取り組むことをより高く評価することになった。ただし、四日市工業高校の使用提案はイベント的なもので、その内容を改め、担当の教員の方には、継手仕口模型の使用を大工に任せるのではなく、自ら使い方を熟知していただく必要があることが指摘され、この模型を通して木造建築の深みを理解して、誇りを持って木造建築教育に活かしてもらいたいという要望が強調された。

個人部門

最終選考の面接を開始するに当り、面接方法や時間配分等を全員で協議を行った。その方法は、質問については、共通の質問を4~5問行ったうえで、各委員からの質問をするという形式にした。また質疑とは別に、それぞれが持参した日頃使用している道具（鉋）を選考委員の島崎英雄棟梁が確認するというも行った。それに引き続き、簡易な実技考査を行い、その様子を見ることとした。実技考査を通して、段取りのよさや継手仕口の理解度などが見えてくる。時間配分については、3人を個別に面接し、質疑応答に20分、簡易な実技考査に20分程度をあてた。実技による考査では、3名とも大きな差はなく、大工として必要な技量という点で課題があり、特に若い棟梁として具体的に手を動かす前に、じっくりと観察し考えてから取りかかる姿勢が望まれた。

その結果を受けて最終選考を行った。これまでの経験や保有する技術・技能、将来性、仕事に取組む意欲、道具の扱い、簡易な実技考査における取組みなどのチェック項目をもとに3人の評価を行った。個別の項目毎では、それなりに優劣がつけられたもののトータル的にはほとんど差がなく接戦となった。

3人の実績は申し分ないものであり、一人だけの選出は難しい状況であった。3名共に将来性には大きな期待が持てる。このプロジェクトの主旨にある木造建築づくりを支え、未来につなぐ若い担い手とはどのような大工であるべきなのかという根本に立ち返った議論も交わされた。人物やそれぞれの異なる将来性を評価し、3名ともに賞を与えることにした。「大文賞」大工1名、「大文賞」奨励大工を2名とすることとした。優劣がつけにくい状況ではあったが、最終的には、全体的なバランスが取れているということで、「大文賞」大工は佐々岡君に決定した。

若手大工育成プロジェクトの経過

「田中文男さんを偲ぶ会」

2010年10月11日 ホテルハイアットリージェンシー東京（東京都新宿区）

若手大工育成プロジェクト「支援講演会」

2011年5月19日 プロジェクト記念講演会 / 東京大学農学部

大武健一郎氏（元国税庁長官）「日本の危機 東日本大震災をのりこえて」

2011年6月24日 第1回支援講演会 / 東京大学農学部

三井所清典氏（芝浦工業大学名誉教授）「地域の復元力となる木造の住まいと建築」

2011年7月15日 第2回支援講演会 / 東京大学農学部

斉藤英俊氏（京都女子大学教授）「桂離宮に見られる構法・技法」

2011年7月22日 第3回支援講演会 / 東京大学農学部

宮澤智士氏（長岡造形大学名誉教授）「古民家の魅力を探る - 土肥家住宅の編年研究」

2011年8月9日 第4回支援講演会 / 明治大学駿河台校舎

橋慶一郎氏（衆議院議員・前富山県高岡市長）「災害を乗り越えて - 高岡の文化財の形成史」

若手大工育成プロジェクト「第一回大文賞」

2012年8月9日 若手大工育成プロジェクト事業計画発表と記念講演会 / 東京大学農学部

後藤治氏（工学院大学教授）「東日本大震災の文化財被害から見える職人の必要性」

2012年12月1日～2013年5月31日 第一回大文賞募集

2013年7月13日 第一回大文賞選考委員会開催

2013年8月9日 第一回大文賞発表と記念講演会 / 工学院大学新宿校舎

宮沢智士氏（長岡造形大学名誉教授）「日本民家研究史の試論」

2013年10月12日 第一回大文賞贈呈式 / 職藝学院

職藝学院 初代オーバーマイスター 田中文男棟梁のことは



宮大工棟梁。1932年茨城県生まれ、戦後まもなく宮大工棟梁に弟子入りして腕を磨き、その後2010年8月9日に逝去されるまで、榎真木建設・榎真木の社長として文化財建造物の修理・復元や社寺・住宅などあらゆる建築を手がけ、幅広い知識と理論重視で学者棟梁と呼ばれる一方、大工を始めとする多くの木造建築技術の後継者を育てられた。

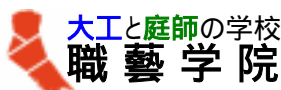
職藝学院設立発起人の一人で、開校時より初代オーバーマイスターを務められる。

（前略）技術者育成の本質とその成否は、制度の是非ではなく、実際に修得を志す人の自覚に大きく左右される。技術の修得は、これまでの学校教育のように、教えられたことを覚えるだけでは到達できない。自主的に馴れて覚え、習って覚えることが重要である。

私は徒弟時代に、師匠や先輩方より次のような教訓を頂いて成長してきた。その内容は現在でも普遍性を持ち貴重である。「仕事は習うより馴れる」「仕事に練習はない」「自分でよく考えてみて、判らなければ教えてもらおう」「職人は一生勉強だ」「くらしは下を見て、仕事は上を見て毎日励め」、これらの教訓の帰するところは、「職人は貧乏でも世の中のためになる人宝になれ」に集約できる。

（中略）私も「職人は貧乏でも」は良くないと思っている。しかし、貧乏の内容をどの尺度で測るかによるだろう。たしかに私を例にとれば、物質的豊かさにはほど遠いのは否めない。けれども、日常の仕事のなかで、新しい問題に出会い、その解決に苦勞をして出来上がったときの喜びが、ひとしおであるのは何物にも勝る。私はそれを人生の生き甲斐としてきた。

「大文賞」については職藝学院ホームページ参照：home > 職藝ネットワーク > 若手大工育成プロジェクト



〒930 - 1298 富山県富山市東黒牧 298（問合せ 9:00～17:00 土曜 日曜 祭日を除く）

E-mail info@shokugei.ac.jp URL www.shokugei.ac.jp

TEL (076) 483 - 8228 FAX (076) 483 - 8222

